

第4回幼・保・小合同研修会

と き 平成30年9月13日(木) 午後3時～午後4時40分

ところ 郡山市総合福祉センター5階集会室



講 演 「子どもの育ちを幼保から小へつなぐ」

～幼児期の終わりまでに育てたい10の姿をキーワードに～

講 師 青山学院女子短期大学子ども学科 教授 浅見 均 先生

◆講師は長年幼稚園教育に携わっており、子どもの主体性を大切に、育てていきたい資質や能力について具体例を示して分かりやすく講演していただいた。

◇「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」について講師からていねいに説明があった。

◇幼稚園教育要領が10年ごとに改訂され、今回の平成30年の改訂に至った。

◇幼保小の関係は、関連～連携～接続に変わってきた経緯について話された。



多くの先生方が参加されました

<幼児期の終わりまでに育てたい10の姿>

- 1・・・健康な心と体
- 2・・・自立心
- 3・・・協同性
- 4・・・道徳性・規範意識の芽生え
- 5・・・社会生活との関わり
- 6・・・思考力の芽生え
- 7・・・自然との関わり・生命尊重
- 8・・・数量・図形・文字等への関心・感覚
- 9・・・言葉による伝えあい
- 10・・・豊かな感性と表現

◆ 講演内容から ◆

◇幼稚園の教育は、遊びを通しての学びであり、子どもが主体。小学校は学びが主体であり、そこにギャップが生まれる。小学校からが本当の教育と考えられがちだが、平成20年度以降、幼保では小学校を意識したアプローチカリキュラムを作成し、小学校ではスタートカリキュラムを作成するなど滑らかな接続を図る段階になった。

◇接続に当たっての留意点として、小学校教育の先取りをするものではなく、幼児期にふさわしい生活を通して「創造的な思考」や「主体的な生活態度」などの基礎を培うことを遊びのプロセスの中で学んでいくことが大事である。幼稚園・保育所で育ててきている具体的な姿を、小学校の生活科を中心に引き継いで行ってほしい。

◇主体性を育てる教育が大事である。やってみたいと思う気持ち、ちょっと難しいことに挑戦する気持ち、子どもの気付きを大切にする。指示通りに動くのではなく、子どもが必要と感ずること、困ったときにどうしたらよいのかを考えること・先生と子どもたちが一緒に話し合うこと等

の深い学びが大切である。

連続性・・・生きる力に向けた3つの力

- 1) 学びに向かう力・人間性
- 2) 知識・技能の基礎
- 3) 思考力・判断力・表現力の基礎

【アンケートから】

- ・普段行っている保育を振り返るきっかけになった。
- ・10の姿だけを求めるのではなく、その姿になってほしいという考えで良い、強制するものではないということを学んだ。
- ・幼稚園と保育所・小学校の差は、現実的に考えると確かにあると思った。
- ・10の姿は幼稚園生活の中で期待される姿であり、小学校でも相通じるものが多いことを再確認できた。
- ・幼保小の話し合いの中で、10の姿を視点に子どもの育ちを話し合うことが大切だと感じた。
- ・年長組の担任として、10の姿をどう扱えばよいか、子どもたちをどう成長させていけばよいか不安だった。10の姿は到達目標ではないこと、年長児までに育っていく姿であることを聞き、これからの子どもとの関わりについて知ることができた。
- ・日々の保育の中で、一人一人の姿をどう見とっていくか、遊びを通して気づかせていくことの大切さを再確認した。
- ・10の姿の基礎となる幼児期の保育活動を充実させて行きたい。
- ・自園のカリキュラムの見直しをしていく必要性があると感じた。
- ・浅見先生の具体例からいろいろ考えさせられました。もっと具体例をお聞きしたかった。
- ・年長組の担任として子どもたちにとって、発達の糧になるような言葉掛けや環境設定ができずにいるので、残りの日々を小学校へうまく送り出せるように努力して行きたい。
- ・遊びを通して文字や数に興味が向くよう今後の保育に生かして行きたい。
- ・育ちには段差がないのに、幼保小の教育に段差があるという現在の課題が印象的だった。
- ・幼稚園で行っている教育・保育内容と小学校入学後の教育内容を互いに理解しあうことが大切だと感じた。
- ・10の姿をていねいに教えていただき大変参考になった。
- ・子どもたちの気付きを見逃さずにより良い環境でていねいに育てて行きたいと思う。
- ・学びを続ける子どもに、幼保小中それぞれの発達段階で同じスタンスで関わることができたら素晴らしいと思った。
- ・自分にゆとりを持っていないと、ついこちらから指示をしてしまうが、それは子どもたちには身につかないということ、「なるほどな」と思った。
- ・子ども自身が気付く経験を大切に保育の重要性を改めて知り、私自身の課題となった。行事に取り組むプロセスについては園としての課題です。
- ・子どもたちへ一方的に伝えていることに気付いた。子どもたちと一緒に困ったことや楽しい遊びについて考えて行きたい。
- ・映像を全部見られると良かった。
- ・日々の保育の中で、子どもたちが自分で考え、あるいはみんなで考えることが重要であり、保育者はその気持ちに寄り添い、子どもと一緒に成長するということが大切であることが分かった。

- 「こうすべき」「こうしたほうがいい」だけでなく、具体例を必ず添えてくださったため、理解しやすく実践しやすいと思った。
- 就学を控えた子どもだけでなく、保育園で過ごすその時から就学について考えることは必要だと思った。
- 先生の話は分かりやすくおもしろく聞くことができた。
- 10の姿の捉え方、子ども主体でルールを作るなどこれからの仕事で生かしたいお話がたくさんあった。
- 子どもたちのトラブルでは、「どっちが悪い」という話になりがちだったことを反省し、それぞれの立場の背景にあることにまで目を向けることを大切に行きたい。
- そうさせていくのではなく、子どもたちの姿の中から見つけていくということが、それぞれの項目で分かりやすく理解できた。
- 10の姿は生活の中では当たり前のような気がする。大人は自然な姿を見守り大切にすべきであると思う。
- 保育士の関わり方しだいで子どもの育ちも変わってくると思った。
- 教育要領・保育指針をしっかりと読むことができおらず、詳しく掘り下げて講義していただき、非常に理解しやすかった。
- 様々な面において工夫された経験や子ども自身が意欲的に、自発的に動く経験を通して、より豊かな保育所生活にさせてあげたいと思った。
- 小学校に入学するまでの期間が子どもにとって非常に大切なのだということが分かった。すべて先回りしてしまうのではなく、子どもが考える時間を作ることが大切だと思った。
- 資料の文字が小さかった。